

## 漢方薬 ①

# 医師の8割、治療に使用

漢方薬は中国が起源ですが、中国では伝統医学を中医学と呼び、漢方といっても通じません。5～6世紀に日本に伝来し、独自の発展を遂げてきました。江戸時代に蘭学と区別するため漢方という言葉が生まれました。古くから伝わるという点では民間薬もありますが、これは口伝で傳承されてきたもの。漢方薬は原典がはっきりしており、この点が大きく違います。

明治政府は漢方薬を否定し、漢方医に医師免許を与えませんでした。日本では現在も医師免許は1つですが、中国や韓国では西洋医学と伝統医学で医師免許がわかれています。

だからといって日本にとってマイナスではありません。西洋医学と漢方を

併用し、患者の治療にあたることのできるからです。2008年の調査によると、全国の医師の83.5%が、漢方薬を日常的に治療に取り入れています。

漢方薬は風邪や高血圧、関節痛から不眠症まで様々な病気に対して使われます。医療用としては、江戸時代の医師、華岡青洲が考案した軟こうを含め148種類。最も古いのは葛根湯（かっこんとう）などで、1800年前の古典「傷寒論（しょうかんろん）」に記載されています。一番新しいのは、医療漢方の父、大塚敬節が考案した血圧を下げる「七物降下湯」。約60年前に開発されました。

（回答者一渡辺賢治・慶応義塾大学漢方医学センター診療部長）

10/30/2011

知  
っ  
得  
フ  
ィ  
ー  
ド

## 漢方薬 ②

# 複数の病気に1つの薬で

痛みに悩む高齢者は多く、膝に水がたまって痛む場合には防己黄耆湯（ぼういおうぎとう）、手足の関節が痛い場合は桂枝加朮附湯（けいしかじゅつぶとう）などを使うのがよいでしょう。高齢者の場合、体の痛みだけでなく、他の疾患を伴う場合も多くみられます。例えば、腰痛があり、前立腺肥大で夜間尿に悩むことはよくあります。漢方薬なら八味地黄丸（はちみじおうがん）で両方の病気に対応できます。

漢方薬が1つの薬で複数の病気に対応できるのも、様々な生薬を組み合わせているからです。八味地黄丸には文字通り、8つの生薬が入っています。腰痛、前立腺肥大のほかにも高血圧や耳鳴りにも使われます。

西洋医学ならそれぞれの診療科で診てもらって薬をもらうことになりませんが、漢方薬なら1つの薬で済みます。高齢化社会において、薬代を抑える観点からも、漢方薬の重要性は高まると考えています。

認知症に効く漢方薬があることも紹介します。釣藤散（ちょうとうさん）は、脳の血流を改善することで動脈硬化による認知機能の低下を改善します。また、徘徊（はいかい）や怒りっぽくなるといった、認知症が引き起こす異変に対応する漢方薬もあります。抑肝散（よくかんさん）で、医療の現場で非常によく使われています。

（回答者一渡辺賢治・慶応義塾大学漢方医学センター診療部長）

11/6/2011

知  
っ  
得  
フ  
ィ  
ー  
ド